

優秀賞論文要旨

The Sexual Revolution in the 1960s and the Crisis of Masculine Identity in Raymond Carver's "Vitamins"

(レイモンド・カーヴァーの「ビタミン」における
1960年代の性革命と男性のアイデンティティの危機)

中 川 侑 香

レイモンド・カーヴァー(Raymond Carver, 1938-88)の短編「ビタミン」("Vitamins")は、カーヴァー作品の中でも特にセクシュアリティを取り扱った作品である。アメリカでは1960年代から性革命が始まった。この物語は女性の登場人物を通して当時のセクシュアリティの問題を強調すると同時に、主人公のアイデンティティの喪失を描写している。この時代を象徴する女性は、パティ、シーラ、そしてドナである。本論文では、3人の女性の登場人物と白人男性の主人公の関係に焦点をあて、主人公のアイデンティティの喪失について考察した。

第一章の「働く妻と家庭崩壊」では、主人公の妻パティを取り上げ家庭崩壊について論じる。パティはビタミン剤を販売して働く優秀な人物として描かれる。一方、主人公は病院で夜間の清掃員として働き、妻より仕事で劣る存在として描かれる。主人公は家庭の中で抑圧された精神状態でいる。主人公は妻に仕事のことで文句を言われても強く反発しない。また、妻に性行為を拒絶され男性として性的に機能しない場面が描写される。この場面においても、主人公は怒りを表したりすることはなかった。主人公は家庭において存在感がほとんどない。パティは確かに仕事ができる女性として描かれている。しかし、それ

以上に主人公に劣等感、孤立感、無力感を抱かせる女性として描かれている。経済力がないことや妻を喜ばせられない主人公は、威厳を保てない無力な男性であると気付かされるのである。肉体労働者である主人公は自信を失い、妻が多く稼ぐという夫婦間の収入の格差も原因で、アイデンティティやそれに深く関係する性能力を喪失していた。まさに家庭は崩壊しかけていた。

第二章の「同性愛の表象」では、レズビアンであるシーラと主人公との対立を取り上げる。60年代のアメリカはセクシュアリティに対して保守的で、同性愛者は精神に異常があると見なされることさえあった。シーラは精神的にも身体的にも病んだイメージで描かれる。主人公はシーラに対して同性愛嫌悪を露にする。なぜなら、特に労働階級のセクシュアリティに自信がない異性愛者は、男性を全く必要としない女性に我慢ならなかつたからであると考えられる。主人公はシーラが男性のアイデンティティを脅かす存在であるとし、自分の人生や社会から彼女を完全に消し去ろうとする。このことから、主人公はセクシュアリティに対して保守的な側面を持つ男性であるとわかった。

第三章の「理想化された女性とセクシュアリティの崩壊」では、主人公がアイデンティティの喪失から回復しようとする試みを、ドナそして、ベトナム戦争帰りの黒人男性ネルソンとの関係も踏まえて論じる。主人公は家庭では得られなかつた男性としてのアイデンティティを築くため、性的にドナと関わろうとする。ドナは魅力的な女性として描かれているが、ドナがネルソンから売春でお金をもらうような女性だと分かり主人公の理想は崩れる。主人公にとって、ドナは決して性的な能力やアイデンティティを回復させてくれる女性ではなかつた。むしろ、ドナが、主人公よりも金と性エネルギーに満ちた黒人のネルソンを必要としたことで、主人公に精神的敗北を与えたのだ。結果、主人公は男性としてのアイデンティティを完全に獲得することはできなかつた。

このように、主人公のアイデンティティの喪失をセクシュアリティと関連付けながら考察した。この3人の女性たちが示しているのは、60年代のアメリカ社会のセクシュアリティにおける秩序の崩壊である。これには、性革命やベトナム戦争が深く関係している。60年代はアメリカにとって試練の時期だった

のである。主人公はセクシュアリティに対して保守的な要素を持ち、50年代の性意識を引きずっている。カーヴァー自身も、60年代の自由恋愛の流行に乗ることはなかった。カーヴァーは「ビタミン」において、古き良きアメリカの家庭、愛やセクシュアリティの考え方の崩壊を示唆したのであった。